

安達 智子 著

# 『自分と社会からキャリアを考える』

——現代青年のキャリア形成と支援

永作 稔

(十文字学園女子大学教育人文学部准教授)



●晃洋書房  
2019年7月刊  
A5・202頁  
本体2600円+税

●あだち・ともこ  
准教授  
大阪教育大学教育学部

本書の構成は、第1章から第7章までが筆者のこれまでの研究成果のまとめとなっている。章題を一部抜粋すると、「キャリア探索と自己効力（第1章）」「理系離れとその背景（第3章）」「学生，フリーター，ニートの比較（第5章）」「性別，ジェンダーと職業選択（第6章）」などであり，各テーマに焦点を当てた研究成果を用いて，現代青年のキャリア選択や最近の就職活動の文脈から解釈と考察が行われている。第8章にはキャリア選択の羅針盤となる最新のキャリア理論が紹介されている。

さて、「自分と社会からキャリアを考える」というタイトルは，非常にシンプルである。しかし，本書を読み込むほどに，これが味わい深く真に迫るものだと感じられる。タイトルはもっとも短い要約であると言われるが，まさにそのとおり！なのだ。ここには「考える」というキーワードがあるが，この行為の主体は，読み手であり，また支援を行う者，支援を受ける者，さらには書き手自身でもあるのだろう。

本書「はしがき」には以下のようにある。

「本書は，データで見ると今の若者はこうなのだという調査結果を一方向的に提示するものではない。キャリア支援に携わる方々に，若者は今こんな状況にありこのように奮闘しているのだという，現在の彼らのあり方について伝えたい。学生の皆さんには，就職の一時点だけでなく生涯にわたってダイナミックに変化し続けるキャリア形成の面白さを知っ

ていただきたい。そして，キャリアの領域を専門とする研究者の皆さんとは，若者の実情を踏まえて研究結果をどのように読み取り，支援に活かすことが出来るかを一緒に考えていきたい」

ここから読み取れるように，「考える」という行為の主体は，まずキャリア支援の担い手であり，先入観や巷に溢れる若者観から一旦離れて，筆者が積み重ねてきた研究結果に基づいて若者が置かれた状況や心情を理解すること，またそこから考えることを促している。例えば，第4章「キャリア意識—若者にとって働くとは—」には，やりたいこと志向が職業未決定に対してプラスにもマイナスにも作用していないこと，この志向は社会人も含む青年層に幅広く支持されている価値観であり，社会の変化がこのような志向性を形づくった可能性が高いこと，などを紐解きながら「やりたいこと志向をもつから仕事が決まらないのだ」というのは的外れな説教と言えそうだ，と結ぶ。

さらに，若者にも自ずと「考える」主体となれるように配慮されている。自分のキャリア形成について考えることは，暗中模索のようなもので不安がきまとうことに寄り添いながら，それでも「面白さ」を見出すヒントが示されているのだ。とくに若者にとっては7章までの客観的のデータに基づいて8章のキャリア理論について考えることが，大いに参考になることだろう。ここで示される最新理論に共通することは，古典的なキャリア理論から学べるキ

キャリア形成の基礎「だけ」では立ち行かない「これからの時代に対応するための智慧」である。自分を知り、社会を知り、未来を展望して将来設計をするというキャリア形成の基本とともに、想定外の出来事に対して開かれた姿勢でいる柔軟さがこれからのキャリア形成に必要なエッセンスであることを説いている。

さらに、キャリアの領域を専門とする研究者にとって筆者のこれまでの研究成果がわかりやすく示され、「考える」ための基礎資料がたっぷりと提示される。その端くれとして評者が考えさせられたのは、筆者のキャリア研究者としての矜持ともいえる姿勢である。それはデータに対して向き合う冷静で客観的な眼差しに同居する、支援を受ける若者に対するあたたかな眼差しであり、これらが随所に散り

ばめられている。これが研究成果を実践に結びつけるための「橋渡し」となって具現化され、支援の指針となっているのだ。しかし、これを実際に行うためには、筆者がこれまでに進めてきたしっかりとした研究の礎が必要となることを忘れてはならないだろう。これにより、研究成果を実践に結びつけ、社会に還元することができるのであり、このような研究者としての在り方について多くを学ぶことができる。

このように、本書はさまざまな読み手にとって、主体的に読み進め「考える」ことができる内容となっている。また、ここで紹介した実践者、若者、研究者以外にも、キャリア教育に携わる全ての教職員や、子育て世代、社会人にとっても手にとる価値のある一冊となることだろう。